

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：3 2 6 8 2

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：1 9 K 0 1 0 8 7

研究課題名（和文）アルカイック期金石文の比較分析によるクレタにおける法の社会化に関する研究

研究課題名（英文）A study on the socialization of law in Crete through a comparative analysis of Archaic Epigraph

研究代表者

古山 夕城（Furuyama, Yugi）

明治大学・文学部・専任准教授

研究者番号：1 0 3 3 9 5 6 7

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、古代ギリシアのポリスにおける法の社会化について、アルカイック期クレタを研究対象として、その歴史具体的な実態に迫ることが主たる研究課題であった。

まず、クレタの金石文史料の具体例として、青銅製武具法碑文の形態・状況を他地域の金属公的碑文と比較検証し、法顕現の儀礼的集合体験を管轄する担当者の特異な職能を浮かび上がらせた。

また、国家統合の核心点であるアクロポリスの社会空間的機能という観点から、ギリシア最初期のドレーロス法碑文とクレタ他ポリスの法碑文との総合分析の結果、法の社会的受容の過程が国家制度の整備と改編に深く関わることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

早くから多数の法碑文が成立したクレタ島において、碑文に記された法が特別な役職者の特異な職能によって、儀礼的集合体験を通じて社会構成員に体得されたことを明らかにしたことは、ポリスにおける法の社会化を考える際に周縁地域研究の重要性を示した。同時に、ポリスの空間的分析方法によって、法の顕現するアクロポリスが共同体国家の社会的結集と再編の核心点となることを歴史的に解明した。そして、その研究過程でギリシア周縁地域における非都市ポリス＝分散居住型共同体の広範な存在を見通し、ギリシア古代史に新たな時代像を切り拓く問題提起を実現した。

研究成果の概要（英文）： The main research theme of this research was to approach the concrete historical situation of the socialization of law in the ancient Greek polis, focusing on Crete during the Archaic period.

First, as a specific example of epigraphical materials from Crete, I have compared the form and condition of the bronze Armor Law inscription with public metal inscriptions from other regions, and shew the unique expertise of the person in charge of the ritual to the collective experience of the manifestation of the law.

In addition, from the perspective of the socio-spatial function of the acropolis, which is the core point of national integration, a comprehensive analysis of the legal inscriptions of other poleis on the Cretan Island and the earliest one of Dreros reveals that the process of social acceptance of law was deeply involved in the development and reform of the institutions of polis.

研究分野：ギリシア古代史における周縁地域研究

キーワード：クレタ アルカイック期 金石文 法の社会的受容 空間分析 古代ギリシア 周縁地域 共同体国家

1．研究開始当初の背景

わが国では、ギリシア世界の周縁地域の研究は、いまだアテネの研究に並ぶほどギリシア古代史の主要な対象にはなり得ておらず、国家の形成と発展において重要な歴史的時期であったアルカイック期を考察の視野に定めた研究成果も、少なくなっているのが現状である。

他方、欧米のギリシア研究においては、考古学分野で大きな進展が見られ、ギリシア各地の具体的な様相が明らかにされてきているが、その反面、歴史的見地からの周縁地域研究は、アテネ史研究で構築された枠組を基準に周縁地域の特殊性や後進性を測るような理解に終始してきた。

クレタ研究に関しても、暗黒時代からアルカイック期におけるポリス成立期の環境と状況が注目されつつあるが、研究の素材を総合的な視点から社会の文脈に位置づけて、ポリス内部の人的関係や国家の構造を再考する研究はまだ始まったばかりである。

2．研究の目的

本研究は、アルカイック期クレタについて金石文史料の実態と象徴性に注目して、次の3つの目的で、ポリスにおける法の社会化を明らかにせんとする試みであった。

(1) クレタ法碑文の実態検証：アルカイック期のクレタ島は早くから法碑文を成立させ、法制定の先駆的地域であった。ギリシア本土とは形態・形式の異なるクレタ法碑文の金石文史料としての形質形態的特徴を、現地調査と比較分析により確認することが第1の目的となった。

(2) 法の歴史的生態へのアプローチ：法が金石文として実在した空間的状况を可能な限り復元し、人々が法を受容していく行為、言わば「法の歴史的生態」を、クレタの同時代の文脈に置いて理解することが第2の目的であった。

(3) 周縁地域における法秩序構築：アルカイック期クレタにおいて、ポリス形成期の法秩序構築の歴史具体的状況を明らかにし、暗黒期からアルカイック期の物質文化のコンテクストに位置づけて、非アテネ地域のポリス・モデルとして提示することが第3の目的である。

3．研究の方法

現地での資料(金石文・遺跡・遺構)の現地検分、法碑文の存在状況の空間的復元、そして肉声による儀礼の身体性の理論的考察によって、アルカイック期のクレタにおける法の社会化ポリスの具体像を解明する課題に取り組んだ。しかし2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大と防疫政策の強化により現地調査が実行不可能となり、計画と方法を次のように変更・修正した。

(1) 研究期間の前半では、初年度に実行できた青銅製武具パーツであるミトラに刻まれた法碑文「スペンシティオス規定」を主たる分析素材とし、(2)後半では、現存するギリシア最古の法碑文でありオンラインでも比較的情報の豊富なドレーロス第1碑文を取り扱うこととした。

この2つの法碑文に焦点を絞ったのは、従来の関心が法文解釈に集中しているため、法碑文の実態的側面に関する分析からの法の社会的受容の考察が十分になされていないからである。

4．研究成果

(1) 青銅製ミトラの法碑文「スペンシティオス規定」の形質形態的考察

法の社会的受容という問題設定に基づき、ひとつの歴史具体例として、青銅製武具ミトラの法碑文「スペンシティオス規定」の実態観察から、法碑文のポリスにおける存在状況の考察を行った。方法としては、共同体内での社会関係と「法の社会化」のプロセスを念頭に置いて、「スペンシティオス規定」を次の3つの類例の存在状況と比較検証を試みた。

この青銅製武具ミトラの法碑文と同じ共同体で奉納された青銅製武具およびその銘文
現在確認されているアルカイック期クレタにおける他のポリスで刻まれた諸法碑文
アルカイック期から古典期前半に成立したギリシア全域の金属支持体の公的碑文

しかし2019年秋のハンブルク美術工芸博物館におけるアルカイック期クレタの青銅製武具奉納品の実測調査を除いては、2020年からのコロナ禍のため、いずれの類例素材についても十分な実地検証を果たすことができなかった。

そこで「スペンシティオス規定」に関する研究方法を見直し、本研究開始前に行っていた大英博物館収蔵の「スペンシティオス規定」に対する予備調査および同博物館公開のウェブサイトからの情報を利用することで対応した。当面の目標として、従来の研究で見逃されてきた青銅製ミトラという支持体の形質とそこに刻まれた法碑文の形式・形体に着目した考察を継続した。

そして、これまで知られているおよそ150例のクレタ法碑文については、それらの出土由來地・存在状況・形質形態的特徴に関する手元資料とギリシアのアルカイック期の公的碑文に関するオンライン情報を活用した。それにより、クレタ法碑文のあり方を総体的かつ相対的に再整理することを研究活動の主軸に据え、その基盤の上に「スペンシティオス規定」の法文内容を再解釈するための方法的枠組みを確立することを目指した。

その結果明らかとなったのは、具体的立地状況が判明する法碑文の事例はポリスの中心聖所の建造物壁面に刻まれており例外は3件に過ぎず、その中でも「スペンシティオス規定」は**唯一の青銅板の形質**であるという事実である。

また、武具パーツという形態では、アルカデス由来とされる銘文付き奉納武具と共通性を持つが、それらが私的性格を持つのに対し、「スペンシティオス規定」は**公的性格の唯一の事例**であるという相違がある。しかし、それらの事実は反面、この武具ミトラ法碑文も、**聖別空間に安置されていた可能性を強く示唆するものである**。

他方で、ギリシア世界全体のアルカイック期から古典期の公的碑文の形質の実態を総攬すれば、ギリシア本土中部・ペロポネソス半島・マグナグラエキアでは**金属板の公的碑文は一般的で決して珍しいものではなく**、「スペンシティオス規定」のように**表裏両面に記載されている事例もキプロス文字のものを含めて7件が確認される**。

そして、それらとの比較分析を通じて、「スペンシティオス規定」の形質形態的特徴（青銅・武具・小さな規模・表裏両面記載・薄い刻字・行間線の欠如）は、**公示機能という従来の法碑文解釈の文脈にはまったく噛み合わない実態的事実**であることが浮き彫りとなった。つまり、この碑文は、法文が共同体成員にひろく読まれることを前提にしていない。むしろ、この特異な法碑文からは、**共同体成員の枠外に立ち、青銅製ミトラを直接手に持ち、自らの肉声で法文を詠唱す**

る、ただ一人の特別な技能と職分を備えた、終身の役職者の存在が浮かび上がる。

すなわち、「神に灌奠儀礼によって約束する者」というほどの意味の名となるスパンシティオスは、共同体内の利害対立からは超然とした立場で、会議や裁きの場で宣誓儀礼のもと法と過去の事例を思い起こさせる任務を一身に担った特別な存在であった。この特異な職能を介して、碑文に刻まれた法は現実世界に顕現し、その場にいる共同体成員たちにも肉声化という身体性のレベルで受容されたのである。

(2) ドレーロス法碑文における polis

本研究が次に研究素材に採り上げたのは、ドレーロスの法碑文である。この法碑文については、**ポリス空間における法碑文の存在状況**に重点を置いた考察を試みた。それは、この法碑文の発見時の調査報告から、その存在状況が十分に判明しているからであり、また何よりも、現存するギリシア最古（前7世紀後半）の法碑文であるため、法の成文化の実態を歴史具体的に解明するケーススタディに最もふさわしい研究素材だからである。

この法碑文は、クレタ東部の小邑ドレーロスにおけるアポロン神殿東側外壁に直接刻まれ、二つのアクロポリスに挟まれた鞍部の北側に所在する広場に面していた。2010 年より進められているドレーロス遺跡の発掘調査により露わとなった広場の整備施設と、神域としてのアクロポリスの配置プランは、国家の中心的神域の建造物に刻まれた法が、社会的宗教儀礼を通じてポリスの成員に受容される空間的状况を具現するものである。

そこで本研究は、ドレーロス法碑文の文面にはじめて登場する polis 概念について、アルカイック期クレタにおける**ポリスの空間認識的観点からの分析と論点**を提示した。この polis 概念は、従来のクレタ古代史研究においては、政治的共同体という抽象概念と都市居住地としての物理空間的な意味とに、二項分離して解釈されてきた。しかし、アルカイック期クレタにおける polis 概念の**両義性を考察の中で統合的に理解**するためには、法の社会化という観点からドレーロス法碑文の空間的存在状況を歴史的文脈の中で考察することが必要不可欠である。こうした問題意識のもと、以下のように研究活動を展開した。

クレタにおける「ポリス」用例の再検証

まず、ギリシア世界における「ポリス」という用語を総覧的に扱ったこれまでの研究では、クレタにおける polis 概念を立ち上げて検討しておらず、この島では**「ポリス」がアクロポリスという中心聖所を示す概念**として公的碑文に言及されていることが、まったく見落とされていた点を批判した。

法碑文における会議体としての polis 概念

そして、クレタにおける諸ポリスの法碑文の文脈のなかで polis 概念の用例を比較検討した上で、その概念の本源的な定義に立ち返って検証した結果、少なくともドレーロス碑文においては、「polis」とは共同体国家の核心地点で開かれる会議体、すなわち「アクロポリス会議」を概念化したものであることを明らかにした。

共同体国家ドレーロスの空間構成

さらに、この点を踏まえてドレーロス遺跡における発掘調査とミラベロ湾岸域の領域調査の

最新成果を参考にして、同時期・同地域の結集居住地アゾリアとの空間地理的な比較考察により、アルカイック期および古典期のドレーロスが都市化現象をともなわない共同体国家であったことを指摘し、さらに polis 概念の用例から、非都市ポリスの想定をクレタの他のポリスにも敷衍する可能性を示した。

以上のドレーロス法碑文の存在状況と法文の分析の結果、「法の社会化」とそれが実現された歴史的事情は、次のように復元して結論づけられる。

神殿壁面のドレーロス法碑文は、**分散的に居住している市民たちが神殿隣接の広場で役職者たちのアクロポリス会議に立ち会い、そこで開催される宗教的・政治的・法的儀礼を集団的に経験する象徴的な焦点**であった。それ故に、polis と表記されるアクロポリス会議は、ドレーロスの最高官職コスモスの再任を規制する法を決議し、コスモスおよび参集した市民たちとともに宣誓の主体となって、共同体国家の主要な機能を担った。この会議体は、スパルタのゲルーシア（長老会）やアテネのアレイオスバゴス会議に相当するものである。

アポロン神殿が建設された前 8 世紀半ば頃から記憶の法として受け継がれていたはずの法文が、その後およそ 1 世紀以上経てから広場に面する神殿東壁に刻まれたのは、おそらくその時期の次のような歴史的事情によるものと思われる。

すなわち、ドレーロスの東に存在していたアナヴロホスの大集落が消滅し、北海岸に位置する港湾集落ミラトスを併合することによって、それらの住民をポリスの共同体成員として再編成するために、ドレーロスのアポロン神殿と重職者たちの会議が開かれるアクロポリスにおいて、**法の碑文化と社会的受容の儀礼**によって国家的統合を改めて確認する必要性が生じたのである。

(3) 総括

法の社会的受容を媒介する特異な職能の存在

ポリス形成期における法秩序の具体的状況の把握という研究課題に関し、「スペンシティオス規定」の形質形態的観点からの考察によって、**特異な職能の役職者を通じて儀礼化された法の社会的受容**というアルカイック期クレタにおける「法の歴史的生態」を明らかにしたことが、本研究のまず一つの重要な成果である。

法の社会化を実践する国家的統合の核心点としてのアクロポリス

また、ポリスにおいて法が顕現する空間の復元による法の社会化のあり方という問題については、神殿壁面に刻まれたドレーロス法碑文の存在状況と法文に現れる polis 概念の分析から、**アクロポリスが長老会議と最高官職者そして参集市民たちの三者が法の社会化を実践する国家的統合の核心点**であった実態を解明したことは、本研究のもう一つの研究成果である。

クレタにおける非都市ポリス＝分散居住型共同体

そして、ドレーロスのケーススタディからは、そのような法の社会化と国家的統合は、必ずしも**都市的空間を前提とするものではない**ことを指摘することもできた。その結論は、**非都市ポリス＝分散居住型共同体がドレーロス以外のクレタ諸ポリスにも**想定されうる可能性を示唆し、而して、クレタのごとき周縁地域の研究のからギリシア古代史における新たな時代像を切り拓く見通しを示したのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 古山夕城	4. 巻 177
2. 論文標題 ドレーロス法碑文における 'polis' とポリス アルカイック期クレタの共同体の合意に関する試論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 駿台史学	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古山夕城	4. 巻 89
2. 論文標題 クレタ青銅武具法碑文「スペンシティオス規定」の形質・形態とポリス社会の法受容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 119-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------